
吸血喰い

櫻木 夢羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血喰い

【Zコード】

Z6954M

【作者名】

櫻木 夢羽

【あらすじ】

何百年にも及ぶ吸血鬼と人間の戦い。ハンターの一人である緋色は吸血鬼を喰らう吸血喰い。死と隣り合わせの毎日を送る彼女はある日、自分の運命を知る。

金色の髪と白い少女（前書き）

Iris mangiare una ragazza vampiro, la luce della luna splento.
e in un colorito spento.

金色の月と血色の少女

妖しく、美しく光る月の下で赤い飛沫が舞う。金糸の髪が揺らめき、金色の虹彩ヒトツが光を失う。

木靈するには、卑下な笑い声。背筋が凍るような、体中の毛が逆立つような、人が嫌悪するような、笑い声。それを発するのは、この世の者とは思えないほどの美貌の女。

艶やかな黒髪に包まれた白い顔に美しい笑みが蔓延る。形の良い唇の端を持ち上げ、ぞっとするほど妖艶な紅い目を細めて、誰もが見惚れるような表情を顔面に彩つて。

「本当に、ハンターなんて大嫌い。洋服は汚れるし、忌々しい薔薇バラ十字形ディ・クロスのせいで治癒力は落ちるし。でも、」

たつた今倒した少女の傍にしゃがむと、少女を抱き寄せる。少女の白い首を指でなぞりながら、少女の傷口から溢れ出る血の香に恍惚とした表情となる。

「こんなにも美味しそうな血が飲めるのだから許してあげる」

そう言つて、女は口を開け、鋭すぎる犬歯を少女の首に近づけた。

ブツリッ

肉を突き破る鈍い音が響き、血の香がいつそう充満する。

「ひつ、あ、ああ」
女が苦痛に喘いだ。

女の首に少女の犬歯が埋まっていた。月光に、少女の目が血の色に煌く。

「くつ・・・・は、なせえつ！」

女は自分の首から無理矢理少女を引き剥がすと、よろよろと後退する。

怒りと驚きに見開かれた目で、少女を見る。

少女は立ち上がり、微笑んだ。美しいその笑みが呪わしく見えるのは、恐らく顔に飛び散った血せい。

「お前、いつたい・・・つ」

少女は口元の血を拭うと、冷たく女を見つめた。そして、一步前に進んだ。

「私？ そんなことも分からぬの？」

そして、少女は女の視界から消えた。

「つ！？」

「私は、貴女の敵よ」

ソプラノの声がそう告げ、女の首に再度痛みが奔る。

一瞬にして女の背後に移動した少女は女の白い首筋に牙を埋め、本能のままに血をにする。

「くつー！」のつ

少女の牙から逃れようと、もがく女の体を少女の腕が貫いた。

一度女の胸を貫いた腕を引いて、女の心臓を驚撃む。

「つー！！！」

痛みに声にならない悲鳴をあげる女は、もう先刻の美しさを持つてはいなかつた。

「はつ、吸血鬼って、本当に醜い生き物ね」

女の首から顔を上げてそう笑うと、少女は腕を引き抜いた。手には、しつかりと女の心臓が握られている。微かに脈打つそれを握りつぶすと、地面に横たわる女を見下ろす。

「哀れね」

そう呟くと、女の頭を踏み潰した。

狩る者たち

世界最高機関世界政府本部、ハンター 狩人協会本部。重々しい名前とは裏腹に荒れきった課。

「課と言つても名前ばかりで、会議はないし、責任者も名ばかり。」

「おう？ 協会長だけ？」

応接室のような部屋で豪奢な椅子に座つて紅茶をする人影に緋色は軽く頭を下げる。

「真面目に来てくれるのは貴女くらいのものですよ」

長い金髪に縁取られた顔は女とも男とも見える。その口から発せられる声も、高くもなく、低くもなく。顔にも特に目立つた特徴もない。

よく言えば普通、悪く言えば地味。

それとは対照的に、緋色は目を引く容姿だ。金糸のような髪と、金色の目は僅かな光の下でもキラキラと輝く。身長は155センチ程で小柄だが、逆にそれが猫のような可愛らしさを印象づけている。「何人狩つてきましたか？」

「三人。一人は元人間で二人は純血種。えーっと、こいつと、こいつで、あと、・・・・・むー、あいつ！」

顔を確認しながら掲示板に貼られた顔写真をばがしていく。最後

の一人は高いところにあったので、指で示すかたちになつたが。

「二人は死体処理班呼んだけど、一人は喰っちゃつた」

可愛らしく舌を出して「えへへ」と笑う。

「まあ、いいでしょ。殺したことには変わりないのですから」「ドサリ、と椅子に腰を下ろすと机に積み上げられた資料を適当に取つてめくる。

「おー、緋色がいるー」

扉が開き、入ってきた男が氣の抜けた声でそつと緋色にすり寄る。

「おはよ、氷」
黒髪に赤い虹彩の長身の男、氷を軽くあしらいながら資料に手を通す。

「ちょっと、氷！置いてかないでよ！」

勢い良く扉を開けて入ってきた少女は緋色と協会長を見ると頬を赤らめて頭を下げる。

「おはよ、弥生」

「何人狩つてきましたか？」

「5人ー、凄いだろー」

緋色に笑顔を向けて氷が白慢氣も無く言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6954m/>

吸血喰い

2010年10月17日02時34分発行